



第129号

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長 森下 弘

TEL (082)503-3191

FAX (082)503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

Homepage: wfchiroshma.net

## 1965年8月7日創立

### ワールドフレンドシップセンター創立40周年を祝って

今年がWFCが発足して40年。8月7日に行われるお祝いの会では、これまでWFCを支えてくださったアメリカ委員の方々をお迎えし、ウィルミントン大学の平和センターからお祝いのメッセージをいただき、WFCの歴史について学びます。そして、コンサートと昼食パーティを催します。午後には、マイクロバスに乗って、WFCの歴史に深い関係のある場所を数カ所訪問します。祝賀会は、留学生会館で10:00から行います。WFCにご縁のある方はどなたでもご出席ください。出席される方は前もってお知らせください。こちらでそのように準備いたします。よろしくお願いいたします。

WFCは1965年8月7日に、バーバラ レイノルズさんと少数の同志の方々によって設立されました。設立後、原爆についてもっと学び、被爆者を援助したいという願いを持つ世界の人々の共感を呼び関心が広がっていきました。

「WFCが基盤とするものは、私たち一人一人が平和を創造するために出来る何かをしなければならないという信念と、私たちを助けて他者に対する強い影響力で他者を変えて行く、私たちが持っている平和の泉をより深く広いものにする究極の真理と愛の力が存在するという信仰です。」ーバーバラ レイノルズ

WFCの目的が実現するためには、強い意志と情熱

の人・原田東岷先生のご指導に負うところが大きかったのです。原田先生は、広島出身の高潔な人柄のお医者さんです。台湾で捕虜として捕らえられていましたが、戦

後帰国された後は、広島にあつて多くの働きをされました。WFCの理事長として、広島が国際都市として生きるための気力を取り戻すために尽力されました。また、広島交響楽団の創設と、野球チーム・カープを作るのに尽力されました。

「どんなに小さくても私たちの毎日の歩みが、世界の平和に向かう一歩一歩となるのが大切です。」原田東岷



WFCはこの40年の間、多くの人々の人生に影響を与えてきました。ここを訪れる人たちは戦争と平和について考える貴重な時を与えられました。他の国の人々との出会いによって国際間

の理解は深まり、生涯の友を得ることが出来ます。また、ここで被爆者の話を聞く機会も与えられます。

多くのボランティアの人たちが、時間を惜しまず、労力を捧げてWFCに集い、平和のために力を尽しています。私たちは8月に行われる心温まる40周年のお祝いの行事を楽しみにしています。皆様、どうぞご参加ください。

## 韓国訪問 PAX チームの皆さんの紹介

### ベバリー アイカンベリー

一年前に WFC のメンバーの2人の被爆者がソウルを訪問して被爆体験を語りました。それに触発されて2人の若者・グローバルピースメイカーの会の尾崎令枝さんと、修道大学で平和学を学ぶ上山耕平君が韓国への PAX チームに加わることを希望しました。WFC の古くからのメンバーである車地かおりさんと山根美智子さんと一緒に4人のチームを編成し、今年2月韓国を訪問しました。



尾崎令枝さんは、1999年からグローバルピースメーカーの会のメンバーとして、また、NO DU ヒロシマプロジェクト、および WFC のピースガイドグループのメンバーとして平和活動に積極的に参加してきました。彼女はまた、インドとパキスタンの人たちがお互いに理解し合うことが出来るようにと力を尽くしてきました。彼女は韓国人と日本人もお互いに理解し合えると信じています。PAX チームの参加申込書に、彼女は「私はまた、平和を実現するためには個人同士が理解し合い尊重し合うことが最も必要なことだと思います。相手が置かれている状況に耳を傾けることがお互いを理解し合うために必要だと思います。」と書いています。

上山耕平君は、修道大学の法学部国際政治学科で学ぶ4年生です。彼は平和学の課程を取れるかぎり取って学んでいます。今回の旅行では、チームの活動状況をビデオに撮りました。彼は参加申込書で次のように所信を述べています。「敵を殺すことは正しいことでしょうか？ 敵とは誰のことを言うのでしょうか？ 犠牲者に国境はありません。死に国籍の違いはありません。私たちは日本が二度と戦争をしないと誓った憲法第九条を守り、実行していかなければなりません。それこそが平和を構築する手立てなのです。」

車地かおりさんは、現在 WFC の理事で、27年の間 WFC の熱心なメンバーとして活躍しています。申込書に書かれた彼女の言葉は、「私たちがお互いに理解し合いお互いの文化を受け入れるなら、お互いを憎む心を生み出すような政治的なプロパガンダに惑わされることはないでしょう。私は、日本の軍隊が韓国を侵略したことを非常に申し訳なく思います。私は、広島、長崎への原爆投下が韓国の人々にとっては解放を意味したと聞いています。韓国の人たちに知っていただきたいことは、戦争が終わったことで日本人もまた軍事政府の圧政から自由になったということです。日本の軍事政府は韓国の人だけでなく日本人をも抑圧していたのです。」

山根美智子さんも WFC の理事で、長年にわたって WFC の忠実なメンバーとして活動に従事しています。彼女は、被爆者が自分をあのような目に合わせた相手を恨むことをせず、「誰にも自分たちが受けた苦しみを受けさせたくない」という切実な願いを持っていることに感動しています。彼女は韓国の人たちが日本の侵略の歴史をどのように見ているのかを知りたいと思っていました。そして「核兵器は非人道的であり、人間は決してあの恐ろしい兵器と共存は出来ないことを訴えたい。私たちは核兵器を廃絶するために努力しなくてはなりません。」と話しています。

韓国の子どもたちは、美智子さんの腹話術のパートナーのシンちゃんに大喜びでした。



## PAXプログラム 韓国へ

### 上山 耕平

山根美智子さん、車地かほりさん、尾崎令枝さんと上山は、PAX プログラムで 2 月 17 日～22 日に韓国を訪問しました。

2 月 17 日、陽の落ちた仁川国際空港に到着した私たちを KAC のイ・ジェヨンさんとレイチエルさんが迎えてくれました。広島から 90 分のフライトで、凍るような寒さのソウルに。



少し遅い帰宅ラッシュに巻き込まれながら、それぞれのホスト・ファミリーのお宅に到着しました。

18日、イさんにピックアップしてもらい、江南のKAC オフィスを訪れました。KAC の経営する英会話学校 CONNEXUS の講師・生徒の皆さんに、自己紹介やPAX プログラムの説明、ヒロシマのことを話しました。その後、CONNEXUS の生徒さんに案内してもらい、西大門刑務所跡に行きました。この刑務所は、日本の韓国支配時に政治犯を投獄・拷問する場として使われ、日帝時代・独立運動の象徴になっています。敷地内には資料館があり、独立運動の英雄や日帝による弾圧の経緯が展示され、地下階には取調室が再現され、蠟人形が悲鳴を上げています。この取調室の周りには、日本を嫌う意図の落書きが多く、説明文もハンゲルなので、韓国人への歴史教育が目的のようですが、韓国人よりも日本人がもっと訪れるべき施設だと思います。その後、景福宮と国立民俗博物館を見物し、オフィスに戻って、KAC の Peace Builder's Class の生徒さんたちと意見交換をしました。まずパネルを使って広島原爆の被害を説明しました。生徒さんからは、「日本から戦争を始めたことはどう思うのか」など、厳しい質問もありましたが、PAX のように直接顔を合わせて話をすることで、相手を理解することが大切なので、私たちが日本の韓国支配当時の残虐行為を学びに来たことを説明すると、ヒロシマ・ナガサキの惨状にも共感してもらえたようでした。

19日、空から雪が降る寒い朝、CONNEXUS の講師とともにDMZ(非武装地帯)ツアーに参加しました。DMZ ツアーに韓国人が参加するためには入念な身元調査が必要で、ツアー客の大半は日本人です。DMZ に入る際にはパスポート・チェック、JSA(共同警備区域)に入る際にはバスを乗り換え、またゲートの手前で全員降りて社内とパスポートをチェックされました。JSA 内には国連軍基地や施設があるものの、原野や田畑が広がっていました。JSA 内に元々住む農家は、税制面でも優遇され耕地面積も大きく、韓国で一番裕福な農家だそうです。北朝鮮との軍事分界線周辺には、両国の施設が建っていますが、分界線がある以外はおだやかな田舎の風景なので、そのギャップが顕著で異質なものに感じま

した。

20日、ソウル郊外の広州市にあるナムムの家を訪れました。歴史館に入り、日本軍慰安婦の当時の状況、慰安婦にされる経緯や再現された慰安小屋内部などを見学しました。法政大学の日本人留学生が案内してくれたので、説明文のハンゲルが読めなくても大変わかりやすかったです。この学生以外にも、韓国に来る日本人留学生がナムムの家を手伝っているの、日本の若者も捨てたもんじゃないなと感心しました。また、イ・オクソンさんの部屋に呼ばれ、コーヒーをいただきながら話を聞きました。WCF のソン・ガンホさんがナムムの家まで迎えにこられ、広州市の近くの楊平にあるWCF コミュニティーに行きました。コミュニティーは山あいであり、ハウスの前を流れる小川は凍っていました。コミュニティーハウスは元々、ソンさんの住まいでしたがWCF スタッフが自分たちで改築し、メンバーなどに広く開放しています。この日は、日曜学校の子供たちが泊まりに来ていて、大変にぎやかでした。

21日、大学路沿いのWCF オフィスを訪れました。オフィスはやや古めの一軒家ですが大きく、多くのスタッフが働いており、WFC のパンフレットも置いてありました。その後、イ・ヒュンウーさんの案内で、買い物をしました。ソウル市内には本通りのようにオシャレな繁華街もありますが、南大門市場は庶民的で商品があふれて活気に満ちていました。買い物を終えた後、WCF の Prayer's Meeting に参加しました。Prayer's Meeting では、WCF が海外で行っている活動の報告や質疑応答、祈りの合唱が行われました。また、今回は新たに交代要員として海外へ派遣されるスタッフの壮行が行われ、会場全体が無事を願う祈りに包まれました。KAC とWCF は姉妹団体なので、Prayer's Meeting にもKAC のスタッフが参加していました。

22日、出発を惜しむように雪が降る中、仁川国際空港を飛び立ち、無事に広島に帰ってきました。凍える寒さのソウルから戻ると、広島はとても暖かく感じました。個人的には、昨年の岡本三夫先生の選挙を手伝って走り回り、正論を語っても世間が反応しない、日本の保守化をますます感じ、平和運動を続けていくことに自信

を失っていたので、韓国で多くの人々が熱心に情熱的に平和を考え、平和運動を行っていることに触れて、元気をもらった感じがします。それとともに、日韓それぞれのマス・メディアの報道がますます信用できなくなりました。韓国では教育とともに、日本のネガティブな部分しか国民に知らされていない傾向があります。日本でも同様です。メディアがセンセーショナルでネガティブなニュースしか取り上げないことと、両政府による自国正当化の思想誘導教育が相まって、両国間の緊張が高まっているのではないのでしょうか。連日の竹島(独島)や日本の常任理事国入り反対の反日運動ニュースを見ても、私は韓国に対する反感を持ちません。なぜなら、それが多くの韓国人の考えていることではないし、私たちと平和を共感できる韓国人が多くいることを知っているからです。顔と顔を合わせて、自分の知らないことを知る PAX に参加して、本当によかったと思います。

## 館長退任にあたって

### ジョエル アイカンベリー

“我々が始まりと呼ぶ事は、往々にして終わりである。そして終えることは、始める事であり、終わった所は出発点なのである”。TS(トーマス・スターンズ)エリオット、“フォー カルテツ”

日本での二年間を私は今終えようとしている。それは始まりなのだろうか、それとも終わりなのだろうか？しばし立ち止まって私は振り返ってみる。驚いた事、興味深かった事、学んだ事、そして経験その物を。何故ならこの終わりの時は、今私の出発点でもあるのだから。

一つの大きな驚きは、原子爆弾に対する私の態度に変化がおきてきた事である。こちらに来る前は、それは恐るべき兵器であるばかりでなく、その使用は根拠無く道徳に反すると絶対の確信を持っていた。ここ広島でその恐ろしさのある面は自分の内面で強化、納得されてきた。然しこちらにいる間かなりの書物を読んで、60年前にさかのぼって、起ったあらゆる事、そういう決定をした人々に断を下す事にはだんだん消極的になっ

てきている。

私は懸命に理解しようと務めてきた。日本は孤立化からどのように進んでいったのか、そして何故植民地支配者となるに至ったのか。何故日本の指導層は真珠湾攻撃という選択をしたのか。アメリカと日本の軍部の人間や兵士達は、戦争に対して、戦闘に対して、又死ぬ事、殺戮する事に対してどのように反応したのか。沢山のどんな要因が原爆の製造、使用、そして何処に使うかの決定に関わっていったのか。

この全てから私はこの爆弾の理解を深めてきた。人、そして街や文化を徹底破壊する恐るべきものとして、かくも長期にわたり健康への影響が及ぶ唯一の兵器として、歴史に類を見ない人間破壊へ向かう核競争のさきがけとして、そして被害者への感情も無く遠距離から行われるとてつもない破壊物を、簡単に梱包し運搬するという方向へのステップとして。

然し、戦中戦後を通じ核以外の兵器により多くの人が大変な被害を受けたり、死亡している事がはっきり分かってきた。東京空爆や沖縄における民間人の死亡者数などがそうだ。更にひどいのは、約 11 年前ルワンダやブルンディで起こった、恐らくその 5 倍、10 倍もの人間の殺戮、これは爆弾や大砲の使用すらなく行われている。

戦争そのものが真の敵であると、私には一層明確になってきた。どのような兵器が使用されようと、人は常に戦争で苦しむ。長期的には、戦争で問題が解決するようには思えない。嫌悪、恐怖、復讐により終わり無き殺戮は続く。

でも広島は私達にとって輝けるひかりだ。戦後きわめて早い時期に、平和国際都市となる意志を明言した。以来広島は色々な面でこの方向を推し進めてきている。核兵器とその影響に関する会議、核実験が行われる度その政府へ送られる抗議文、国中に報道される毎年の原爆祈念式典、国際平和連帯都市市長会議での主導的役割など。

被爆者達は、戦争、原子爆弾の性質、自身への影響、そしてそのような事を再び起こさせない為に彼等に何が出来るのか、何をすべきなのか、様々な問題と格

闘している。広島の人達は核兵器反対、戦争反対、劣化ウラン弾に反対の声をあげている。

ワールドフレンドシップセンターはこの40年間、広島からのその明るいひかりの一部分であり続けている。戦争の原因となる力、特に核兵器の開発や使用に反対してきた。この目的の為に、彼等はここ広島での経験を広く知らせる為の努力をずっと続けている。異文化交流を増進し、相互訪問で国際理解を深めており、これからも続く。議論の為のフォーラムを持ったり、世界平和、平和の為の行動と理解、核兵器などに関わる問題について市民教育を提供したりしている。

WFCの人達は、定期的に新しい館長を迎え入れ、あふれるほどの支援と暖かい思いやりで待遇している。その際立つ友愛精神の最新の享受者が我々というわけで、家庭菜園で、海で、とれた気取りの無い食品や、あちこちの珍味、又観光旅行、近場での新しい経験、はたまたセンターの為の、英語クラスの為の、我々の仕事や努力に対し勇気づけられる評価など頂いた。

私達は、センターを通して、又「広島世界平和ミッション」のような平和を目指す他の活動への関心と参加を通して広島の経験に加わる事ができた。二年間皆さんと共にする機会を得た事を限りなく有り難く思う。共に我々は、内なる自己の、相互間の、そして全ての人々の間の平和を熱望し、努力しているのだから。

私達の人生はこちらでの経験により心を動かされ変わった。**有難う御座いました！**

エレノア・ルーズベルトの言葉に「あなたの人生には多くの人立ち来り立ち去るが、真の友人のみがあなたの心に足跡を残すだろう」とある。私達の心には、理事やクラスの人達をはじめ、広島の本物の友人が沢山刻印されている。

## **各クラスからお別れの言葉**

### **■火曜日クラス（城戸ゆかり）**

ジョエルとベヴァリー・アイカンベリー夫妻にWFCで出会えたことを心から喜び、ご夫妻の平和のための貢献に感謝いたします。上品で知的なお二人から、たくさんのお話を学ばせていただきました。

明るい火曜日クラスの方々と、とても素敵なベヴ先生と共に本を読んだり、国際情勢について話したり、料理や屋外授業、その他様々な楽しい活動しながら充実した時間を過ごしました。クラスでの体験は、興味深く、知識が増え、その上英語も上達し、特にベヴ先生からは、世界の人々と分かち合うことの大切さを学び、嬉しく思います。どこにいらしても、お二人、いつまでもお元気で幸せに暮らして下さい。お二人のことを思い出しながら、世界の平和を願っております。

### **■金曜クラス（花田れい子）**

WFCの館長交代の時期が又やって来ました。ジョエルが受け持つ事になって以来、以前よりアカデミックになったような金曜クラスも終わろうとしています。

彼の説明は専門的で、時には電子辞書と殆ど同じであったりして驚かされ、彼を“生き字引”と呼んだりしています。しかし、実際は私達は何も変わらず、相変わらずの単純な話題にジョエルは落胆しているかと思いますが、いつも冷静、寛大でいてくださいます。

ベバリーも又、理知的で細やかな心遣いを感じます。初孫の誕生を待つ彼女は喜びを隠せない様子でしたが、この春、その可愛い初孫アイザックは広島へ来て、おばあちゃんと一緒に臨時にクラスを担当して下さったのです。2時間の間、邪魔する事も無くとてもお利口さんでした。ベバリーとアイザックの、最初で最後のクラスも私達には楽しい思い出です。

館長先生との交流は何時も楽しくもう20年以上も続いています。人生の3分の1近くも愉快的な金曜の朝が続いている事に感謝致します。

### **■水曜朝クラス（尾池ツヤ子）**

ジョエルのレッスンもそろそろ終わりということで、時の速さを痛切に感じます。

この2年間世界中でいろいろな出来事がありました。私達もイラク問題、地震、津波、アメリカや日本の文化、はては家族やプライベートなことまで、いろいろ話題にとりあげました。ただ残念なことに私たちの英語力ではなかなか話が発展せず忸怩たる思いが残ります。

私たちのつたない英語を辛抱よく聞いてくださったジョエルに感謝します。レッスンを通して新旧のメンバーともお互いになかよくなりました。楽しいレッスンと思い出をありがとうございました。次回お会いするときまでにはもう少し英語で話せるようになりたいと思います。

### ■水曜夜クラス（神田高明）

お国へ帰られる時が来ました。おめでとうございます。長い間ご苦勞様でした。お別れに際してお礼を申し上げたいと筆をとりました。

水曜日の夕方、WFCに集まってご夫妻を囲んでの会話は、教室というよりサロンという風でしたし、ときにWFC滞在のお客様も交えてさまざまの国の方たちとの交流もできていつも楽しいものでした。生徒は昼間仕事をお持ちの方が多く、その都合もあって出入りがあり、顔ぶれも変わってきて、昨年春から参加した私が今では古株になっています。常に新しい顔ぶれと新しい話柄が出てくる中で、いつも変わらぬ楽しい雰囲気は、ジョエルの穏やかで静かな語り口と、ビヴァリーの明るくやさしい笑顔、お二人の人柄から生まれるものだったという感にうたれます。

思いが溢れすぎてうまく申せません、ずいぶん楽しい時間を頂きました。これからもお元気で活躍ください、クラスの皆に代わってお礼申し上げます、ほんとうに有難うございました。

### ■木曜日クラス（堀益 芳子）

ジョエルとベブがWFCに来られて2年近くになります。光陰矢のごとしと言うように時のたつのは速いですね。自己紹介のとき、ベブがBeverlyの発音を私がbeverageといったものだから訂正してくださったのが昨日のようです。

ジョエルは、世界情勢に対する幅のある見方、そして何よりも英語に対する深い知識のためにみんなの尊敬の的ですが、「become victims」と「be victimized」の違いなどを質問したとき、「それぞれの単語は、マイナス、プラス、中立、継続、結果などの意味合いを含んでいる」と教えてくださりとても勉強になりました。

した。その上、木曜クラスのメンバーはとても個性的、前向きなので私はとてもよい刺激を受けています。また、ジョエルの英語は最初私には多少速く感じられました。彼の英語は、単語の語尾の子音を飛ばして次の単語とつなげたり、私たちが教科書で学習する発音と多少異なるアメリカ英語だからです。このことに気づき慣れたころ、私たちの先生ジョエルは帰ってしまわれます。ああ、もっと一緒に勉強したい！

ベブはとても聞き上手で話に割り込むということをしていない人です。心をこめて宿泊客をもてなし彼女の平和への思いを伝えるために枕もとに折鶴を1羽おいていくということです。ベブとジョエルは、とても素敵なカップルで私は、もっと一緒にお話したり勉強したりしたいです。ありがとう、ベブとジョエル。お二人のお陰で、この2年間私はとても楽しかったです。ありがとう。いつまでもお元気で！

## 広島世界平和ミッション参加 「インド、パキスタン」訪問報告

岡田恵美子

2005年1月24日から2月15日迄、インド、パキスタンを訪ねる。インドはニューデリー、ムンバイ、ナグプール、ワルダール、パキスタンはカラチ、ペシャワール、イスラマバード、ラホールを巡ってきた。一行は被爆者の私を含め5名と、記者カメラマンの総勢8名である。

インドのニューデリーでは牛馬と人間が路上生活している中、カルギル紛争で負傷した兵士を訪ねた。彼は、政府からは何も保障は無い、軍の命令で再び行けと言われたら行く、と話す。

次の日インドの共和国記念祝賀パレードを見た。核ミサイル『アグニ2』、陸海空軍、警察隊の行進、戦車、戦闘機、軍事力を誇示する派手なパレードだった。パレードを見ている子供達は武器をどのように感じているのか？会場の外側では食べ物を求めてごみをあさる沢山の子供達。大きな軍事力の下で最低限の暮らしも保障されずに生きるのが平和なのか？

インド門周辺広場に集う人々に質問をぶっつけてみる。「広島、長崎を知っていますか?」「インドの核保有に賛成ですか?」「パキスタンや米国の保有をどう思いますか?」「自国の核保有は「平和の為」と賛成し、パキスタンや米国ののは反対、「インドは自衛の為、パキスタンは威嚇の為だから駄目」。しかし若者達の多くは「ヒロシマ」と言う言葉にピンと来ない様子。私は被爆体験を語り「再び核兵器が使われたら世界は滅びます。イン、パの若者達が対話で核廃棄の方向に持っていけないだろうか」と話した。

ムンバイでは大英帝国からインドを独立に導いたマハトマ、ガンジーの命日平和行進に参加し、ヒロシマの願いを訴えると共にガンジー精神も学んだ。

未来のジャーナリスト達は「米国への憎しみをどう乗り越えたか?」「今の米国に何か働きかけをしているか?」と質問し、「核大国が国際社会で発言力を持つ現実を否定するのは難しい」と強い口調であった。

国立マハトマ、ガンジー国際ヒンディー大学では記念の楯を頂いた。

インド中部ナグプールにある「民族義勇団(RSS)」本部を訪ね、その精神思想部門指導者に聞く。「私利私欲を捨てて朝夕のヨガ、団結力で愛国が育つ」、「インドは他国を侵略した歴史の無い国」、「インドの核政策は正しい」「世界には核の力で押さえ込もうとする国がある、インドも対抗できるだけの力を持たねばならない」等と言う。私は折り鶴を手渡し「広島を案内しますから是非きてください」と握手、彼の目元が緩んだ。彼はこうノートに書きつけた、「世界の平和の為に、皆兄弟愛して働こう」。

根強い核抑止論が存在するインドだが、取材陣から「被爆者らメンバーがインドで訴えたいのは何か」と問われた。私は国営放送(一億人の視聴者)に生出演し、被爆体験、核被害を語り、核拡散が続く世界での平和実現の為インド、パキスタン、日本の若い人達が手を取り合い我々の努力を引き継いで欲しいと話した。

ある学校での学生の質問、「米国は今も原爆投下を謝罪していない、どうして憎しみを乗り越えられたのか」には「苦しみ悲しみ憎しみの気持ちを乗り越え膝を交え

て話をし平和を作るほうが良いと私達広島の間人は気づいたのです」と答える。

インドで訪問した学校9校、集会10回。学生らの「私達若者の手で平和を保とう」という手作りの、パキスタンへの平和メッセージやポスターを預かりパキスタンへ向かう。インドの人々は本当は平和と友好を願っている、とパキスタンに伝える積もりだ。

## パキスタン篇

パキスタン最大の都市カラチで「平和と人権の為に子ども博物館」の建設を進めるNGOを訪ねた。目玉は「核ギャラリー」世界の核被害を展示し核時代に警鐘を鳴らす、核問題を正面から取り上げたいとの事。昨年7月広島を訪れWFCに宿泊し、原爆資料館も訪ねたアリスさんいわく「用地購入とビル建設で約二億二千万円」。「核兵器の製造を考えたら大した額ではないですね」と言う私にアリスさんは苦笑しながら頷いていた。

IPPNW主催の健康マラソンに参加する。汗を流して手作りした横断幕を掲げ、広島や平和の尊さをアピールした。

パキスタン医師会(PDPD)会長を訪問しパキスタンの現状について話を聞く。国を守る為核兵器が必要とするイスラム教徒、核を持っていれば安心と思っている人々、パキスタン人の6割以上が貧困の為教育が受けられない、莫大な軍事費が貧困に繋がっている等々。貧しい人達は核兵器の話より今食べるパンが欲しいのだと思った。ヒロシマの悲劇を伝えても通じない、教育費は国内総生産の4%に過ぎない、この国の政治家にあなた方から教育の重要性を訴え圧力を掛けてもらいたい位だという。

パキスタンの若者は原爆については殆ど知らないし、教科書にインドの事が悪く書いてありインド人は悪者だと信じている。パキスタンでの集会6(1865人)、学校7校(930人)を訪問。インドの若者から預かったメッセージ、ポスターを手渡す。ある夜ホテルに来訪者。昼間訪ねた高校の生徒達を書いた画用紙の束と封筒に入ったメッセージを渡される。「僕達で平和にしよう。僕たちは未来なのだから」思わず感涙。

ペシャワール、イスラマバードのアフガン難民キャンプを訪ねた。キャンプで生まれ母国を知らない子供ら、赤茶色の水を飲む子、衛生状態は劣悪。ボランティアでイラストレーター女性が、絵で子供らの笑顔を繋ぐ。私は絵を描く輪には入れない子供達と一緒に紙を張り合わせ巨大な折鶴を作り、「平和、愛、命」とかいて広げた。

難民の家を訪ねる。薄暗い部屋、泥まみれの子供達、13人目の子を妊娠中の母親、電気も水道も無く、子供は震えていた。近くの家では、入り口を入ったら牛も鶏も人と共同生活、女性と子供ばかり12人暮らし。肺炎で高熱の赤ちゃんが土の上の寝具に寝かされ、「神の御心にあるのみ」と医者も薬も無く、ただ神の加護を願う。諦めの表情を見る辛さ。私の孫が持たせてくれたお守りを握り赤ちゃんが元気になる事を祈った。

ラホールでイン、パ両国のワガ国境での警備兵士の交替セレモニーを見学。互いに扉の向うの相手を威嚇するように行進し、門が開き両国兵士が形式的に握手を交わす。観客の拍手に複雑な思いを抱く。

その夜、パキスタン元財務大臣の家を訪ね話を聞く。彼は、プット政権在任中に予算要求を拒否し解任され、退任後は軍事政権下で4度逮捕され拷問も受けた民主化の闘士だ。退任後は市民と交流し触れ合う。市民が政治に不信感を抱き、対立や戦争よりも平和を求め様になっているから、市民の若い力で民主化がもたらされるだろうと語る。

帰国後に明るいニュース。対立したカシミールでバスの運行始まり、ムシャラフ大統領、シン首相の首脳会談がニューデリーで実現。微々たる進展でも、これを機会に両国が対話を続け理解を深め、少しづつでも良好な関係に発展して欲しいと願う。

## 新館長夫妻のご紹介

### ベバリー・アイカンベリー

ドナルド&ポーリン・ヘスさん御夫妻はバージニア州、マサニューテンから来られます。御夫妻は退職後、さまざまなクリスチャン団体で、ワシントンD.C.のホワイトハウスで、また子供の保護災害救済事業など、そ

して、「平和のための退役軍人」と云う平和団体などでボランティア活動をしていらっしゃいます。御夫妻はWFCでの奉仕活動をとっても楽しみにしておられます。ドンさんは1986年にブレザレンの教会の公認牧師になり、教会関連の奉仕やキャピトルヒルの交換クラブの奉仕を積極的になさいました。



199

7年からは教会の管理や発展に関する教育と養成に力を注いでこられました。

1953年に米国陸軍に入隊し、人事分野で准士官に任命されました。1975年まで部隊から国務省の職員までの軍隊のあらゆる部署で働かれました。1975年以降に、軍の准士官の教育と訓練の向上を働きかけるための非営利団体を立ち上げられました。

ポーリンさんは1971年から1993年までヘストンコーポレーションでコンピューターオペレーターとして働かれました。給与支払名簿や勘定書作成に携われ、その後、従業員のさまざまな健康診断の管理の責任者となりました。11年間ホワイトハウスで毎週ボランティア活動をされました。スクエアダンスやラウンドダンスを楽しんだり、困った人々のお世話もなさっておられます。

ドンさんとポーリンさんは5月20日に来広予定です。

## 友愛編集委員

英語版 ベバリー・ジョエル アイカンベリー

日本語版 山下美枝子 山根美智子

佐久間佳子 掘益芳子

平本隆子 浜井道子